

フランス文学研究室 NEWS

平成 29 年 4 月 21 日
第 5 号

この号の内容

- 1 刊行の辞
- 2 イベント報告
- 3 在学生数
- 4 卒業生進路
- 5 学部生の声
- 6 就職活動記
- 7 大学院生の声
- 8 グルノーブル滞在記
- 9 グルノーブル印象記
- 10 フランス文学を学ぶ意味
- 11 編集後記

在学生数

博士後期課程 6名
博士前期課程 2名
研究生 1名
学部生 8名
計 17名

学部生の声

「オン・ガード、プレ？アレ」。高校3年間で1万回以上言っただろう。当時は知らなかったが、今ではそれが「En garde. Prêts? Allez」だったと分かる。

私は高校時代、フェンシング部に所属していた。練習に使う用語も、試合で審判が使う用語もフランス語だったため、入部直後は先輩に教わった用語をノートにカタカナで書いて覚えた。覚えた用語の意味は理解しており、「オン・ガード…」であれば、「構え。用意はよいか。始め」を意味すると分かっていた。しかし、普段は意味を意識することもなく、単なる合図のようなものとして使っており、フランス語として認識することもなかった。

その認識が変わったきっかけは、大学に入って第二外国語としてフランス語を選択したことだった。授業で出てくる、フェンシング部時代に使っていた単語は、カタカナで表記できる合図ではなく、フランス語として意味を持った言葉であり、初めて出会ったような不思議な感覚がした。

今ではフランス語の勉強を始めたばかりのころと比べると、カタカナでイメージしていた、聞いたことのある単語が自分の中でフランス語に置き換わるという驚きは減ってきた。しかし、アルファベ(ット)からなる記号の羅列を文法というルールに当てはめると意味が分かってくるという、暗号解読のような体験は変わらず面白い。単語、文法、解読した文の意味など、今後も学ぶべきことはまだまだある。勉強を続けて、新たな面白さを見つけていきたいと思う。

(学部2年 工藤さやか)

刊行の辞

かの国フランスの文化にかかわる皆さま、こんにちは。このたびフランス文学研究室 NEWS 第5号を刊行することとなりました。この時期、学部新生・卒業生、博士課程入学・進学生、そして留学生と、未来を望み進路を決め、心構えをリフレッシュする時期と重なります。

本年2月にはこのたび就職の決まった方々の報告・説明会があり、それぞれ就職先の選択理由、準備、面接の受け方などの講話のほか、フォーマルではない、忌憚のない、微に入り細にわたる密度の高い経験談など、仏文を仲間とする同志としての話も聞くことができました。さらにその後に催された同窓懇親会では、在校生はもちろん遠方からも多くの卒業生が集まり、研究室は立錫の余地もないほどの盛況でした。こうした雰囲気のもとにたくさんの方がたが集まるということは、私達にとって本当に素晴らしいことです。

この便りからも今現在の仏文教室の雰囲気をお察しください。しばらく足の遠のいておられる同窓の方もわれわれ後進に檄を飛ばしつつ旧交を温めてくださいますよう、そしてまたグルノーブル研修にかかわる哲学・倫理学、国文学教室をはじめとする本学の研究室のかたがた、新たな2年生、さらにはオープンキャンパスで訪れる高校生のみなさんも、こうした機会には是非教室においで下され、仏文との交流をますます深めていただければ幸いです。それでは以下の便りをお楽しみください。
(修士2年 長尾貞紀)

イベント報告

2016年10月22・23日 日本フランス語フランス文学会秋季大会 於：東北大学(大会実行委員長=今井勉先生)

2016年10月2~13日 黒岩卓先生、エステル・ドゥーデ先生(グルノーブル=アルプ大学教授)共同研究・教育プログラム「グルノーブル大学研究集会」実施

2016年4月15日 ジャクリーヌ・セルキリーニ=トゥーレ先生(パリ・ソルボンヌ大学名誉教授)講演会「ヴィヨン詩における形式の戯れ：韻とリズム」

平成28年度卒業生進路

就職：日仏文化協会翻訳部、宮城県高等学校国語教員、山形県庁、東ソー株式会社、茅ヶ崎市役所、株式会社ジー・テイスト / 進学：東北大学文学研究科博士後期課程進学 2名

就職活動記

étrangerの感、という芥川の言葉が記憶に引っかかっている。いや、僕は国文学のことは知らない。2単位分だけ勉強した国文学の講義で、チラッとこの言い回しを見かけた程度だ。浄瑠璃を見に行ったら皆和服で洋服姿の自分が場違いに感じた、という文脈だったか。大した意味で使われている訳ではないが、これほど僕の人生で忘れ損なっている語句も少ない。いったい、自分の人生を振り返って、僕が étranger でなかった瞬間がいつきでもあったのだろうか。僕に限らず、みんな本質的には他の人と比べて異質であるのだが。

院進学とともに哲学から仏文へ転専修したときも、フランスに住んで改めて、フランス社会に溶けることができずに残っている自分を実感したときも、学部生ほど若くなく博士課程生ほど専門性がない修士課程生の状態で就職活動をしたときも、僕は étranger であった。自分が他より異質であると気づくことは目の冴えるような暴力に晒されることだ。

だがそれは理性の目覚めでもある。目覚めなければ判断はできない。判断ができなければ行動はできない。

就職活動は、一連の行動として見ることができる。行動は結果によってその徳が証明される側面がある。いま述べたように、行動には判断が、判断には認識が求められる。大学院生、留学経験者、文学専修など、一般的な就活において自分が特殊な人物であればあるほど、周りの就活生との違いに気づき、気を病み苦しむことは多い。だが、自分が特殊・異質であることを知っている者ほど判断に近く行動に近い人間もいない。もしあなたが自分の異質さに苦しんでいるならば、あなたはほんとうの正解に最も近づいている一人である。

(修士2年 中井宏典)



◀就職講演会後の懇親会

大学院生の声 ソマーヌの城を訪ねて

アヴィニョンの東、エクサンプロバンスの北西に連なるヴォークリューズ山脈に位置するソマーヌは、広大な面積を誇るフランスでもたどり着くのが特に困難なところであるかもしれません。奥深い山々を抜け、眼下に広がる雲霞を見下ろし、木々を揺らす冷たい風に吹かれながら、昂然とそびえ立つのが、マルキ・ド・サドが五歳から十歳を過ごしたソマーヌの城です。その起源を十二世紀に持つこの城を私が訪れたのは、SATOR（文学におけるトポス研究学会）が主宰する国際学会に参加するためでした。一日目はエクス＝マルセイユ大学で開かれたのですが、二日目と三日目はソマーヌの城壁の中で討議が行われました。フランスでも屈指の歴史を持つサド家が所有し、マルキ・ド・サドがこの上なく愛したとされるソマーヌの城は、人里を遠く離れた、あまりに孤独で瞑想的な自然の只中に位置し、サドが夢想した世界の果てに住む隠者のイメージは、ここに由来するのだろうかと思わずにはられません。長らく放置されていたサドの城は、近年、改修が進み、近々、博物館として一般公開されるそうです。城内は展示予定の品々が未整理のまま置かれており、その中にはマルキ・ド・サドの頭蓋骨の複製がありました。思いのほか小さいサドの頭蓋骨の眼窩のくぼみに私の視線は引き寄せられました。普段は遠く日本でテキストを通じて考えているフランスの歴史や思想、文化といったものが、ぼつねんと置かれたサドの城や頭蓋骨に接することによって、まざまざと意識させられました。確かに彼らはかつて生きていたのだ、と今更ながらに考えてしまいました。

(日本学術振興会特別研究員
石田雄樹)

「近現代詩読書会」のご案内

新しい読書会のため、紙面をお借りして告知をさせていただきます。このような機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。

以前は、学生が読書会を開いていたものですが、最近その習慣は忘れられています。ひとり読書世界を開拓するのも豊かな営みですが、誰かと読書体験を共有するのにも、また別の楽しみがあります。そこで、また読書会を開きたいと思います。

内容は、「近現代に書かれたフランス語の詩を読む」というものです。短めのテキストを一回完結で読み、フランス語の作品に親しんでいければと思います。初回の題材には、ボードレール「シテール島への旅」Baudelaire, « Un voyage à Cythère »を取り上げたいと考えています。ご参加希望の方は、白石（下記）までお申し込みください。また、その他お気軽にお問い合わせお待ちしております。多数の方にご参加いただければ幸いです。

白石冬人 mail: hiver2homme7@gmail.com

グルノーブル滞在記

今まで大きな旅行は東京・京都への修学旅行くらいしか経験が無く、国際線に乗ることさえ初めてで、入国審査の窓口がほとんど開いておらず、一部の人が急に開かれたゲートからスムーズに出ていき、近くで並んでいた人が何語かもわからない（文句を言っていることはわかる）言葉で叫び始める、という光景をシャルル・ド・ゴール空港で見て、入国前から不安と期待が一気に膨らんだのを覚えています。到着後も初日から日が暮れるまで街を歩き回って、古い感じのする建物や専門に特化した店が多く立ち並ぶ、日本とは違う雰囲気を楽しみました。歩き疲れて喫茶店でジュースを飲んでいたときに遊園地にある機関車のような乗り物が目の前の狭い路地を



行き過ぎるのを見かけ、店の人に何とか尋ねて教えてもらった広場の待合所に行き、書いてある次の出発時間まで待っていると、到着した運転手さんが案内板を片付けてしまい、次の便は出さないから明日以降来るようにといなされる、という不思議な出来事もありましたが、嫌な気分はせず、これが噂のフランス式かとむしろ面白くなってしまいました。プチ・トランと呼ぶらしいその乗り物にも次の自由行動の日に乗り、とても気に入りました。パン屋さんで指さしではなく名前を言ってパンを買ったこと、仙台ならどこでいくら払えば手に入るのか見当もつかない大きな鴨肉を部屋で焼いて食べたこと、TGVから見た景色など、何から何まで新鮮で、またフランスに行きたいと思うような記憶ばかりです。一方、肝心の研究集会に関しては発表中の記憶が無く気づくと質疑応答の場で、フランス語での応答が上手くできなかったのは大きな反省点ですが、本当に良い経験をさせて頂きました。

（修士2年 土門さやか）

■グルノーブル研修概要■

黒岩卓先生、エステル・ドゥーデ先生（グルノーブル＝アルプ大学）の企画による、共同研究・教育プログラム。グルノーブル＝アルプ大学に10日ほど滞在し、研修を受けてから研究発表を行うというもの。

東北大学からは国文学、哲学・倫理学、フランス文学の各研究室より教員・学生計9人が参加した。発表内容の洗練・ネイティブチェックは、渡仏前からあらかじめグルノーブル大の学生が行ってくれていた。

他にも、グルノーブル市立図書館の見学、市内のエクスカッション、シャルトルーズ修道院の見学、キャンパスラジオへの出演など、現地学生との交流活動は多岐にわたった。

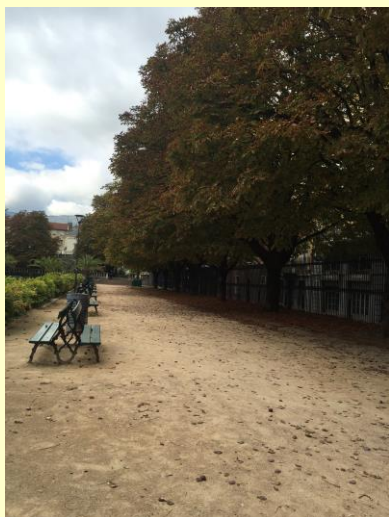
グルノーブル印象記

この度の研修における印象記を記す前に、本プログラムを企画して下さった黒岩先生、我々を受け入れて下さったドゥーデ先生および現地の学生の方々に感謝の意を表したい。国際集会での発表を始めとする貴重な経験の数々は、以上の方々のご尽力、お力添えなしには実現しえなかった。

ある日、グルノーブルの街、イゼール川沿いを歩いていると、やや大きな広場があった。通り沿いに植えられた木々に目を遣る一椽である。永井荷風は『ふらんす物語』所収の小品集に、「椽の落葉」なる表題を付した。その「序」において、荷風は「ああ、われは如何に深くこのマロニエを愛せしか。わがフランスに於ける、忘れがたき記念は、一ツとしてこのマロニエの木陰に造られざるはなし」と述べる。荷風が一年にも満たないフランス滞在中に見た椽の落葉は、このようなものであったか。あるものはすでに色づいた葉を落とし、またあるものは依然としてその緑を残し、いずれは枯れゆく定めを匂わせている。

フランスの秋の夕暮れは、日本のそれと異なって、未だ色づかぬ空に徐々に日が傾き、山陰に隠れんとするその束の間の光を湛えている、そんな風景である。四方を山脈に囲まれたグルノーブルは、日を隠すのを急いでいるようにも思えるが、しかしその余光は最後まで放たれている。フランスの風土気候を「感覚的 *sensuel*」と表現し、五感を以って知覚していく短編「秋のちまた」において、荷風が表現した「幽暗」な秋の風景は、やはりこのようなものであったか……。

（国文学・修士1年 廣瀬航也）



フランス文学を学ぶ意味

フランス文学を読む意味とは何か——仏文学会の会員数はもとより、この分野を学習しようとする学生すらも減少し、多くの大学から仏文科が消えていきます。フランス文学を研究対象として教壇に立つ（あるいは立とうとする）我々はつねに仏文の研究意義を自問せざるを得ません。しかし同時に我々は「自分がなぜフランス文学研究を志したか」ということを忘れてはならないはずで、フランス文学は決して一部の専門家だけのものではありません。古代ギリシア・ローマから、哲学・美術・政治・社会などの様々な文化を継承して発展したフランス文学は、21世紀を生きる我々の心を照らし、悩みに寄り添い、個々の経験の意味を教えてくれる、人生の伴侶とも言える存在です。

就職先の近畿大学法学部の講義「国際化と異文化理解」では、私の専門であるプールのテキストを媒介として、受講者が自らの経験を振り返り言語化する練習を行います。文学的素養を備えていない法学部の一年生が、プールのテキストをヒントとして今まで生きてきた時間を意味づけ、自分自身のことをしっかりと語るようになる様子を見ていると、文学の可能性を改めて実感します。

フランス文学は自らの進むべき道を照らし、人生を意味づける不可欠な文化です。東北大仏文科の学生の皆さんがフランス文学とともに素晴らしい未来を切り開くことを願っております。
(近畿大学法学部特任講師 高橋梓)

編集後記

今年度の研究室 NEWS は例年以上に発行が遅れてしまい、心よりお詫び申し上げます。皆様の多大なるご協力なしには完成しませんでした。昨年は、これを読んでくださった OG の方からお便りも頂戴し、とても嬉しく存じます。

この編集を担当させていただいて3年になります。続々と集まってくる原稿を読むと、ひとりひとりの個性は豊かでありながら、前年度までの記事に見える NEWS 伝統(?) のようなものをゆるやかに受け継いで書いてくださっているのがうかがえ、興味深いです。

3面をグルノーブル特集にしたのは、私もこの研修に参加したためです。研究集会については、質疑応答のフランス語を用意していったものの、実力(があるとすれば)の5割しか発揮できなかった、という苦い感覚ばかり残っています。例えば自分のフランス語の癖や文法のミスを直して暗記していったつもりでも、実際の質疑応答で言ったことの半分は直す前の癖や誤った文法で出てきた、ということです。したが

って、200パーセントの勉強をしないと100パーセントの実力は発揮できないようなのです。

楽しい思い出ももちろんあります。滞在したホテルのごく近くに大型スーパーcarrefourがあり、そこで非常に質の良いお花が売られていました。薔薇を買って部屋に飾っていたら、同室の土門さんが、帰ってくるなり「急にすごいホテルみたいになりましたね」とびっくりしてくれ、しかもホテルの人がやったと思いついてくれていたのです。また、みんなでシャルトルーズ修道院を見学した際、野の花の写真撮っていたら、引率して下さっていた国文学の先生に「玉田さんは鳥や花がお好きなんですか」と聞かれた場面もありました。そのとき、まるでお花畑な脳でも、学業として小夜鳴き鳥の表象の研究などをしてられる私はなんて幸せなのか、と実感したのでした。

それでは皆様、ぜひ次号もお楽しみに。

(修士2年 玉田優花子)

▼芋煮会にて。山形風の縮めのカレーうどん



フランス文学研究室ホームページ

学生のエッセー、先生方のご活躍情報、留学情報、研究室 Q&A など、盛りだくさんの内容を随時更新中です。

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

「フランス文学研究室 NEWS」に関するご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

Email : ange.no.shirabe@gmail.com